

サン＝テグジュペリのエントロピー論

高 實 康 稔

Pensées de Saint-Exupéry sur l'Entropie

Yasunori TAKAZANE

はじめに

とりわけ「星の王子さま」で世界的に親しまれているサン＝テグジュペリが数学、物理学、化学、生物学などの自然科学に強い関心を抱き、その方面の驚異的な読書量を基に、生命や人間、時代と未来について深い洞察を書き残していることは一般の読者にはあまり知られていない。また、彼の研究者にしても文学研究がほとんどで、自然科学系の彼の考察を理解する上での基礎知識に欠けていたり、その上、考察そのものが「手帖」にのみ書き留められた自己流の記述・表現であるために随所に難解を極め¹⁾、いわば深入りを避けてきた感があるのも無理からぬところである。私自身、エントロピー、光子、量子などのコトバに出会うと即座に理解不能と決めこみ、「これがあの同じサン＝テグジュペリの書いたものだろうか」と驚きとたじろぎを禁じえなかったし、今もって理解の及ばない箇所が多々残されている。しかし、これらの考察が彼の思想研究にとって不可欠のものであることは容易に察せられ、理解不能では済まされない一種のうしろめたさを覚え続けた。また、戦時の抜き差しならぬ状況下での考察だけにその感はいっそう拭いきれなかった。「手帖」の翻訳の出版²⁾はその点の解消に大いに役立ったが、物理化学的基礎知識を備えない限り十分な理解には達しえないことには変わりなかった。例えば「マックスウェルの魔物」とは何か、「ほくは $\frac{1}{h}$ の現存の度合いを質量と呼ぶ」³⁾ というときの h とは何かを表面的にであれ知る必要があった。「エントロピー」についても当初私は無知であった。そこで、サン＝テグジュペリを一步離れて、必要な基礎知識の獲得に努め⁴⁾、再び「手帖」に戻る外はなかったが、この順序を踏むことによって「難解」の度合いが次第に薄れていったのみならず、サン＝テグジュペリの生命論、人間論の深さに改めて驚嘆したといつてよい。Homme（普遍の人間性）や Cathédrale（大寺院）といった彼特有の概念の

背後に、生命や人間活動とエントロピーとの関係についての深淵な考察が秘められていることを知った喜びは大きい。また、生命の誕生と意識活動（文明）に無限の希望と愛情を注いだ彼のエントロピー論そのものの意義ももとより新鮮に私の胸を打った。

本稿では、世界戦争という不幸な時代に命を賭して苦悩したサン＝テグジュペリが、文明の進化に予測なき期待を込めて「手帖」に書き綴った生命と意識とエントロピーとのかかわりに関する思索の解明に努めるとともに、現代における彼のエントロピー論の人間的・精神的意義について考察を加えることとしたい⁵⁾。

I 生命とエントロピー

サン＝テグジュペリのエントロピー論は、まず「生命はエントロピーの勝利に対する抵抗である」（「手帖」IV-78）⁶⁾という生命観に根差している。生命が存在しなければ、太陽からやってくる「エネルギーは石に受けとめられ、拡散し、世界のエントロピーを増大せしめていたであらう」（IV-78）と説く。このとき彼は生命の営み自体が必然的に生じさせるエントロピーの発生を無視しているのではなく、「いかなる転換であれ、エネルギーの転換はエントロピーの増大へと向かう傾向にあるが、そこに生命と意識が介入する場合のエントロピーは比較的少量である」（IV-79）と、熱力学第二法則の正しい理解を前提としている。「このようにして植物は光を救っている。ぼくはいくつか洞穴を知っているが、そこでは苔はランプに照らされて成長し、ランプの光を収集しえたのだ。壁一面の苔でおおわれた洞穴は、おそらくすべての光を収集したのであらう」（V-22）と、苔の生命力が光を救う姿に感嘆していることも、苔を構成する分子が無生物のままで洞穴中に散乱、拡散している状態と比較すれば、苔の存在はエントロピーを少量に抑制しているのであるから、熱力学の原理に適っている。

サン＝テグジュペリのエントロピー論は、このように生命活動との関係を詩的に表現し、次いで「生命のみがエネルギーの貯えを組織する」（IV-110）、「数百万年前から太陽がぼくたちに分け与えてきたあのエネルギー（石油、石炭…）の跡をたどると…そのエネルギーの貯蔵を生みだしたものが生命であること、ただ生命のみであるということは意味のないことではない。（中略）エントロピーの増大に生命は抵抗する」（V-19）と述べて、生命とエネルギーとエントロピーの関係に着目している。すなわち、生命はエネルギー拡散の法則に抗してエネルギーを貯蔵する能力を持ち、従ってエントロピーの増大を防いでいるというものである。

II 意識とエントロピー

生命と意識の同一性

サン＝テグジュペリは生命自体のもつエントロピー抑制の本質とともに、〈意識〉のもつエントロピー抑制作用を力説する。「生命と意識の同一性」(IV-79)という彼の生命論からすれば、この結論はごく自然なものである。

しかし、ここで注意すべきことは、〈意識〉は人間のそれのみを指してはいないという点である。また、植物や動物と人間を区別して論じてはいないだけではなく、人間の〈意識〉もいわば自覚された一般的・表層的な意味での「意識」のみを指してはいないということである。「生命論とぼくが言うのは、意識が現れる現象のこと」(IV-78)であり、「ぼくは夏に氷を、冬に火を生ぜしめるなにかを——あるいは重力に抗して樹が天に向かって成長することを——意識現象と呼ぶ」(同上)のであって、生命の誕生もその活動も起源は〈意識〉に求められるとし、「生命を二つの時期に分けること、つまり〈意識以前〉と〈意識以後〉というふうに分けることは擬人的な考えである」(IV-72)と述べて、〈意識〉の絶対性、すなわち〈意識〉と「自覚」ないし「意図」との峻別を強調している。

このように〈意識〉は生命の起源に位置するとともに、「飛行機を想像したのと同じように、眼を想像する力があれば、眼はうまれてくるであろう。なぜなら意識は創造的だからである」(IV-35)と語られているように、〈意識〉は創造的方向性をもつものとされている。「意識とは(中略)知性を超越するものだ。意識は抽象化へと向かう歩みの案内者」(IV-94)であって、「創造的なものはそうでないものに勝り、有機的なものは無機的なものに勝る」(IV-81)というのも、〈意識〉によるいわば「創造的進化の公理」(IV-81)⁷⁾を説くものである。ただし、神秘的生氣論とも受けとめられかねないこの〈意識〉論は、それとは明瞭に一線を画すものであることにサン＝テグジュペリは一方で注意を促していることを忘れてはならない。「創造とは方向であり、方向はつねに眼には見えないものである」(IV-74)という限りにおいては生氣論的であるが⁸⁾、「物理化学ではもはや解明しえないある種の現象があると称して、ますます神秘の地点へと後退していく生氣論者の姿勢はまちがっている。なぜなら秘奥から秘奥へと進めば、本質的なもの、つまり根源にふれるであろうが、それはつねに分析しようにもできないものだからだ」(IV-74)と、神秘的生氣論を明確に排除している。また、「樹木の形成過程を種子の化学的決定論と環境の作用の相関関係によってのみ説明すべきだからである」(IV-38)と述べて、その際、「どのように」形成されるのかは解明できても「なぜ」そのように形成されるのかという疑問は残るとしているのにすぎない⁹⁾。

「＜意識＞は人間とその他の生物とをともに＜統御＞（IV-94）しているが故に、
「種子のような宇宙的物质は必然的に人間を含み、それは一直線に人間に到達する。
というのも、人間をかたどる選択もまた、自然の法則だからだ」（IV-38）と、生命
の「創造的進化」が一定の過程を経ながらもたらされるのみならず、「ほくの発電装
置と生きた細胞とのあいだに基本的な差異は少しもないということを認めておきたい。
そのとおりなのだ。この両者はいずれも意識の支配に属する同じ法則に従っている」
（IV-78）ことになるのである。そして、このように「意識と生命のあいだにはつね
にこの同じ対応関係がある。理性¹⁰ または意識、それは選択の力だ。生命についても
同じである」（V-26）が故に、「物質プラス意識から生まれた生命」（IV-78）がエ
ントロピーの増大に抵抗する存在であるのは、元をただせば＜意識＞の働きだという
結論に達するのである。

「＜意識＞」のエントロピー抑制

要するに「エントロピーの増大に生命は抵抗する—また意識はエントロピーの方向
を逆流させることができる。マクスウェルの悪魔のように」（V-19）とか、「熱力学
でエントロピーと呼ばれている現象を、自然界の到るところにほくは発見することが
できる。意識が介入しなければエネルギーは散逸する」（V-17）というとき、この
＜意識＞は決して人間の「意図」ではないという前提を銘記する必要がある。確かに
エントロピー抑制をめざす人間の意識的・意図的行為をサン＝テグジュペリは強調す
るが、それはこの前提を踏まえたものであり、人間の行為がいわば根源的＜意識＞の
現象として現れている場合を指してのことである。＜意識＞は基本的に「創造的方向」
をとるものだからである。「ほくという石炭が自然のなかで燃える場合、それは大気
中で燃え、エントロピーを増大させる。しかし人間としてのほくが石炭を燃やす場合、
ボイラー技師としてのほくの努力がいかなる方向に向かってはらわれているかを知っ
ている。つまり、それは石炭を燃やしながら世界のエントロピーを最小限度にくだ
める方向へである」（IV-78）、「もし人間が介入すれば最終状態は同じではない。ほ
くの蓄電池の容量は世界のエントロピーに対してその容量分だけ得をしたことになる」
（IV-79）というのは、人間の意図的行為に対する評価ではなく＜意識＞の現れに対
する評価であって、これらの人間の行為は＜意識現象＞といっても過言ではないもの
である。また、「意識のダム（有機的構造）がなければ、太陽から生まれるエネルギー
を貯蔵することはできない。なぜなら、水位の増した湖は、受けとるものと同じだけ
のものを失っているはずだから」（IV-25）というときも然りである。観念的だとの
批判もありえようが、サン＝テグジュペリにとっては、人間の意識も自然界に生命を
誕生させた＜意識＞に源を発する系統的・創造的所産にすぎないのであって、人間の

意識と生命の＜意識＞との連動性をこのように理解することによって、逆に彼は人間の意識の根源的生命性の認識を深めたといえよう。Homme（普遍的人間性）に対する限りない信頼も、自然界のエントロピーの増大を抑える生命自体の働きへの深い感動と認識に根差しているのである。

しかし、これから述べるように、人間の表層的意識・意図による行為が普遍的＜意識＞の「創造的方向」に逆行する場合も現実には数えきれないので、＜意識＞の方向と直接的に合致する行為を「理性によるコントロール」(V-17)¹¹⁾と表現して、あまたの逆行行為（現象）と区別しているようにも思われる。もっとも、「じつはエントロピーの増大は無生物の科学においては専横的な力を示しているが、生命の科学においてはそうではない。ときとして、われわれは言語が予見しえなかった、また正当化しえないような革命を目撃する。（冷静に考えれば戦争以上に許容しがたいものがあるだろうか。…中略…）しかし、エントロピーの増大に反抗して立ちあがる人間がときに現れる。同じように生命は統計学に反対し、もろもろの分子を組み立て、人間を再武装し、潜在的なものを挽回する」(V-33)¹²⁾として、許容しがたい理不尽な現象も＜意識＞の反撃の対象としての一種の効用が指摘されていることには留意を要する。「Hとエントロピーが人類を再武装させるであろう」(V-30)¹³⁾というのも＜意識＞の働きとしての推理であろう。

試練としての現実に対する深い洞察

サン＝テグジュペリは＜意識＞の「創造的方向」を阻む現実の世界を深く洞察していた。仮に試練としてではあれ、現実の世界が矛盾に満ちていることを見逃しはしなかった。彼の＜意識＞論は決して楽天的理想主義ではない。戦禍の時代を正面から受容して生きた彼の人生に照らしてみても、それは現実的悲観主義の所産とすらいえるものである。「手帖」のⅣ・Ⅴに凝縮された＜意識＞とエントロピー論は、その悲観を克服するための悲痛なる思索といっても過言ではない¹⁴⁾。

役人の抽象的な思考(Ⅳ-5)、食物連鎖の生態系を乱す乱暴な手法(Ⅳ-7)、理想的未来社会の実現を安易に説く主義・主張の横行(Ⅲ-95)、エントロピーの増大・エネルギーの拡散にすぎないデモクラシー(V-33)、戦争とヒトラー的な狂気と破局（言語の崩壊）(Ⅳ-161)、概念的価値を奪われた個人の死滅(Ⅳ-162)、文明や宗教などが目指してきた普遍的なものを温存しえない良識・常識の破綻(I-91)、キリスト教によって確立された人間をキリスト教の破壊によって救済しようとする尊属殺人的矛盾(Ⅳ-136)、主義主張に忠実であろうとして互いに憎み合い、銃殺も辞さない人々の名誉なき死(V-34～35)など、人間と社会・文明の閉塞状況に対する冷静かつ苦悩に満ちた洞察が随所にみられる。とりわけ世界戦争の渦中に投げ込まれ

た彼自身の実感がこもる言葉として、「人間が戦争を愛しうるなどとはとても考えられない」(Ⅳ-161)のに避けられなくなった戦争ほど大きな矛盾はないであろう。「強者の吸引力。ドイツを中心とした再編成。他方、アイルランド、フランドル、チェコなどの解体。そして全中央ヨーロッパ」(Ⅳ-63)へと拡大していく戦時下を生きながら、「不思議なことに沈黙と祈り(人間がおのれのあずかりしらぬところに導かれるような祈りを形成する力)が不足している。(中略)今日の魂は、角のように固いものになっている」(Ⅳ-11)¹⁵⁾と、強靱な精神力をもつ彼とても人間性喪失の時代に暗澹たる思いを隠しきれないのである。

人間の尊厳への信頼と期待

サン＝テグジュペリの悲しみは深い。しかし、彼の偉大さは、人間の未来に対して楽観的な予測を禁じつつも、＜意識＞の現れとしての人間性の回復に強い期待を抱き続けたところにある。人間と時代に対する深い失望は、却って＜生命・意識＞への傾倒の原動力とさえなっているといえよう。生命における進化と同様、人間性の回復という進化にとって不可欠な要素は＜意識＞であり、＜意識＞だけで足りると彼は言う。

「非常に大切なこと、それはさまざまな面での観察の結果に従えば、進歩はたとえ直線的なものであらうと、未来の予知を少しも必要とせず、現在についての単なる意識(そしてこの意識が許容する構造の概念的諸変化——純粹に創造的な諸行為)があればよいということだ。逆に無秩序またはエントロピー増大へと向かう傾向は、いかなる進歩も意識がなければ考えられないことを示している。高度に組織化された、蓋然性によってはなんとも説明しがたいある型へと向かう直線的な進化は、目的論の概念を必要としない。なぜならこのような概念は精神を少しも満足させないからだ。どの段階においても、意識による上昇飛行があれば十分である。」(Ⅳ-109)

係争や二律背反の問題、決定論や目的論の存在に悩まされながらも、サン＝テグジュペリの不動の関心は人間の尊厳を高めるものに向けられていた¹⁶⁾。「ぼくは目的と手段を区別する術を知らないし(中略)、防御と攻撃を区別する術も知らない。なぜなら、生命が運動を創造するからだ。自分が目的に達したのか否か、あるいは手段のなかにまだ浸っているのかどうか、どうして、それがぼくにわかるだろうか。ともかく(階級を攻撃するにせよ、擁護するにせよ)築くということこそ、ぼくの仕事なのだ。より広大な総合のみが魅力的なのである」¹⁷⁾として、＜意識＞に呼応する人間の尊厳の確立のための総合を目指し、「人間の文明は人間のいまだく観念をこえて尊敬される」¹⁸⁾という公理から出発して「人びとのなかにある普遍的なものを求め」¹⁹⁾、精神の「偉大な『帝国』」²⁰⁾を築くことを自らに課していたのである。

人間の意図や行為が＜意識＞の創造的方向に一見して逆行する諸現象の存在を見落

とさなかったように、サン＝テグジュペリは《意識》による創造的未來の形成についても、「はくは社會の進歩も言語の進歩も予見することはできない。生きた細胞の進歩についてもしかりである」(IV-33)、「いかなる予見も誤りであった」(IV-34)と、予見・予言の可能性を慎重に退けている。「眼を想像する力があれば、眼は生まれてくるであろう」(IV-35)という《意識》の創造性と、「意識が眼を予見しえない」こととは矛盾しないという。それは「実現された出来事の流れを遡ってみると、たったひとつの原因の連鎖しかないのに、その流れをくぐれば多くの可能性があるからである」(IV-33)からであって、「もし意識が眼を予見しうるものなら、宇宙は目的論となる」(IV-33)として予見と目的論とともに排除する厳密な論理を展開している²¹⁾。予見の不可能性は科学についてもいえることで、「科学、それは反復を予見することであり、(中略)(隠されている)同一性の探求とその発見」(V-28)にすぎず、「科学の目的は將來の予見だと言われるたびに、実際はくは不愉快な思いをしてきた。このような概念を一刀両断のもとに切り捨て、科学はなにものも《予言する》ものではないことを証明しなければならない。社會の明日(保険料)も、生物學的な明日(未來に向かつての進化)も、(中略)予言するものでないことを証明しなければならない」(同上)ことを力説する。

もちろん、この予見の否定は、独善的な目的論・決定論に陥らないための規制的な考察とはいえても、《意識》の創造性というサン＝テグジュペリの基本的な概念に何ら抵触するものではない。それは先の引用文に続けて、「しかし、経験の周辺には、まだなにものとも同一とは認められていない、まだ行われていない経験がある(創発的進化論哲学との關係を参照せよ)。おそらく、時間のある種概念には秘密があるのである(《付加する》時間は《広がる》時間ではない)」(同上)と、時間の役割の中に未経験の「創発的進化」²²⁾の發生の秘密を求めていることによっても明らかである。その發生が目的論に基づく予見と一致するとは限らないことを警告しているのにすぎないのである。

予断を許さないとはいえ、欺瞞と退廃、憎悪と戦争の現實に抗する人間性回復の歩みは、《意識》の創造性、すなわち世界のエントロピーの増大を抑制・統御する方向性への認識と信頼によっていっそう強められるであろう。それは幾多の困難をのりこえて文明とともに築かれてきた人間の尊厳に対する絶望なき信頼に外ならず、矛盾や係争を超えて「人間とは超克しようとするものである」(IV-139)²³⁾からである。

しかし、「たったひとりの人間がこうむる不正をすべての人間に加えられた攻撃として改めて感知するのでない限り、いかなる希望も存在しない」(IV-125)というサン＝テグジュペリが、「個人よりも世界的なもののために戦う」²⁴⁾、「個人は一つの道でしかない」²⁵⁾、「戦いで殺されても一向に構わない」²⁶⁾と、自己犠牲の「価値」を選

択した生き方は、英雄的とはいえあまりにも悲しい「奉仕」²⁷⁾ といえないだろうか。また、＜意識＞の熱情的な称賛は、この犠牲的な道へのなくてはならない精神的支柱であったといえないだろうか。この支柱が「文明に比べれば死はさしたることではない。われわれは星に向かって消えた音楽である」(V-16) という詩を生んだのであろう。また、「わがたましいよ、主をほめよ。/(…) こうしてあなたは若返って、わしのように新たになる」(IV-128) とヴルガータ聖書の「詩篇」の一節²⁸⁾ に目をとめたのも、星に向かって消えゆく者の、＜意識＞に対する熱い帰依を物語るものであろう。

＜意識＞概念の提起

サン＝テグジュペリは現象の理解や矛盾の解決にはそれらに適応する概念の確立が欠かせないと言う。彼のことばを借りれば、「概念は定義を含んでいるが、それに先行するもの」(IV-155) であり、概念が確立されるまでは「ある全体にすぎなかったが、やがて存在となるもの」(同上) である。さらに「ひとつの概念を創造することとは、ちぐはぐなものの中にひとつの全体を、ある構造を、あるいは条件反射によって結ばれる関係の網の目を、創造することである」(V-58) と説明するとともに、「至福とは最高の概念をもつことであり、宇宙を統一するある＜観点＞へと上昇することである」(IV-140) と、概念の必要性を訴えている。

「人間性」²⁹⁾ も「人間の尊厳」も一つの概念にはちがいないが、人間と文明の現実はこの概念の未熟さを証明しており、未だ確固たる構造をもつ普遍的な存在となるには至っていないことを示している。人類は「敵と味方を結びつけてくれるもの、それを表す言葉をまだもたない」³⁰⁾。すなわち、敵と味方を結びつける概念を未だもたないのである。「生命と意識の同一性」やそれらのエントロピーへの抵抗、＜意識＞の創造的進化という彼の＜意識＞論は、平和と人間の尊厳に関する全体的かつ不変的な「概念」として提起されたものと思われる³¹⁾。なぜならば、概念の「＜単純性＞、その単一性は不変なものとしてのその恒常性からのみ由来するものだ。(中略) ぼくが築きあげているのはいくつかの不変なものである」(IV-152) と諸概念の構築を目指していることを明らかにし、しかも「もしその不変性が一連の安定した諸関係によってゆるぎないものとなるなら、その構造は指導的たりうる」(IV-153) として、ゆるぎない概念の構築を追求していることを表明しているからである。

エントロピーは熱力学の第二法則であることにとどまらず、時間とともに人々に不変の指導的概念として浸透しつつあることを思うとき、エントロピーを基軸としたサン＝テグジュペリの＜意識＞論もまた人々の思想と行動を律する一つ概念として次第に確固たる位置を占めるに至ることを願わずにはいられない。

後述のように、サン＝テグジュペリの＜意識＞論には生氣論的不確定性³²⁾ をはじめ

とするいくつかの疑問がすぐにも浮かび、それがこの魅力的な概念の本質的な部分をなしているとしても、なお全体的に未完成の域を出ないとはいえるであろう。また、戦争を含む人間の意識的な行為がエントロピーの増大を招くあからさまな現実の中で、あらゆる生物の発生と方向に関与する《意識》と人間の意識との根源的共通性を説くことにも人々は抵抗を覚えるであろう。しかし、《意識》は本来的に世界のエントロピー抑制に寄与するものだという《意識》概念は、必然的に人類を自己の生命と意識の原点に立ち返らせる作用をもち、その方向の彼方に平和と人間性の回復もあることに疑問の余地はない。《意識》の概念化というサン＝テグジュペリの差し迫った願いもそこにあったといってよいであろう。

根源的な手直しと《意識》

「いくつかの崩壊、そして根源的な手直しが必要だということは、あまりにも歴然としている」(IV-163)

生命に関する物理化学的考察、精神分析論やマルクス主義に関する考察など、純粋に科学的、思想的な省察として時代背景を抜きに解釈することもできる覚書が多数を占める「手帖」の中で、これらも実際には時代背景を考慮しながら読むことによって理解が深まるというべきではあるが、上記の引用文のように、明らかに当面する時代の緊急の課題に関する覚書も少なくない。これらは特に「手帖」の記載年代をつきとめる上で重要な手掛かりとなるものであるが³³⁾、敗戦から亡命へと至る人生最大の苦境のさなかにおけるサン＝テグジュペリの思索を追う上でも興味尽きない貴重なものである³⁴⁾。

「根源的な手直し」を求めて彼は米国へ亡命した³⁵⁾。「思想を行動から分離させる(中略)分析家や歴史家」(V-1)にはなれなかったからである。手直しの行動にとりかかる思想を彼は「手帖」IVをしめくくるかのように次のように記している。

ほくはヒトラーが抗しがたい存在だとは思わない。ヒトラーは海の重さを再発見している。それはわかっている。しかも、ある角度から見れば、それは天才的なことだ——しかし、われわれとしては、船の主肋骨の威力を見つけ出しさえすればよいのだ。精神が望むならば、世界にある形を与えることができる。そして意識は、重力、エントロピー、種に抗して構築することができる。もし、あの托鉢する人を神の姿になぞらえるなら、彼はひとつの都市の釣り合いをはかることもできるのだ。(IV-163)

ヒトラーへの反撃、それは米国の世論と政治を促して参戦へと導き、自らも従軍す

ることに外ならなかったが、「船の主肋骨の威力」、すなわち武力の立て直しが急務なのであって、サン＝テグジュペリに反戦論を期待することはできない³⁶⁾。このことは本稿のテーマからそれるので指摘するだけにとどめるが、彼の〈意識〉論に照らして問題なのは、精神と意識によって世界を変え、それはとりもなおさずエントロピーへの抵抗であると断言していることである。本来、〈意識〉の流れの中にある人間の意識は、何かを望むことはできてもその結果を予言することはできないはずであった。〈意識〉の流れに沿うものであれば、せいぜい希望のかなう可能性が高まるのに過ぎなかった。神秘主義や観念的思考を努めて排斥してきたサン＝テグジュペリが、緊迫した状況の中で、「根源的な手直し」の使命感を抱き、美しい衣をまとった深奥な〈意識〉概念の構造から図らずもはみ出してしまったというべきであろう。しかし、彼は袋小路に陥った諸々の古い概念を捨ててこの新しい概念を志向する過程で「神性」に触れ、「それらすべては神のなかに見出されるものだ。あなたは、おそらく失われた世界を入れる偉大な容器である」(Ⅳ-22)³⁷⁾、「神性は月並みな趣味にあらがう個人を通して表現される」(Ⅳ-25)、「デモクラシーのなかではくはこの悲惨な個人を救う。しかし真の西洋文明のなかではくが救うのは神である。人間の権利ではなく、人間を介して神の権利を救うのである。はくは神を——人間のなかを示されたその姿を——尊敬するが、個人を尊敬しない」(Ⅴ-31)と記していることに着目すれば、彼のいう〈意識〉概念には、物理化学的客観性と世界史・人類史の教訓に加えて、西洋文明の精神的支柱である神の概念が包含されているといって過言ではあるまい。若い頃はキリスト教に懐疑的であった彼が、晩年になるにつれて神の概念に惹き寄せられていったのは事実であり、客観的たらしとする一方で〈意識〉の根底に神性を宿らせ、人間性の回復、文明の進化への限りない信頼と期待も神性への信頼に根差していた側面を否定できないであろう。これは〈意識〉の方向性に予見を禁じたことと明らかに矛盾している。この矛盾は、しかし、〈意識〉概念の全体像を損なうものではなく、本質的にエントロピー増大の方向性に抵抗するという概念規定をもった〈意識〉が、一切の予見から遠ざけられること自体に無理があるのであって、「意識はエントロピーに抗して(世界にある形を)構築することができる」という予言はむしろ美しい矛盾の暴露というべきであろう。さらには、ヒトラーとて必ずや打倒できるという予言も、〈意識〉の創造的方向性に対する信仰にも似た信頼に基づくものであって、必然とはいえないまでも、歴史上の厳粛な事実として見事に的中したことは人々に感銘を与えずにはおかないであろう。

予言を含むこの覚書(Ⅴ-163)にはもう一つの重要な問題がある。それは冒頭部分に「かりに、はくが人びとに死を受け入れさせる言語(ヒトラー)を作り出すとしても、はくは自然に反しているわけではない。自然はそれを受け入れる。はくの言語

は種の傾斜のなかにその根をおろしている」と書いていることである。これは、結論からいえば「従軍パイロット」の執筆の動機と決意を示すものと思われる。ここで「はく」という主体は、他の箇所にも時折みられるように《意識》自体の具現者もしくは《意識》自体を指すとも考えられなくはないが、その際「はく」は《意識》の基本的な方向にいわば試練としての逆行現象を投げかける深慮遠謀な《意識》の具現者（ここではヒトラーのような存在）という外はないが、全体の文脈からみてもこの解釈には無理があるといわざるを得ない。もとよりヒトラーとは正反対の立場からではあるが、この一節は文明への奉仕と犠牲の尊さを米国の青年に訴えた「従軍パイロット」の高揚した筆致と、事実この書を携えて戦場に赴いた多くの青年の存在を想起させる。ここに言う「自然」とは《意識》と同義語とみなされるが、米国を参戦に導き、青年たちに従軍志願を呼びかける使命感に燃えた、窮地に立つサン＝テグジュペリのこの悲愴な意識を「自然」はどのように「受け入れた」のであろうか。人々の理解と感動、そして彼自身の「奉仕・犠牲」の悲劇を超えて、《意識》の真実にはなお即断を許さない深奥な領域が秘められているように思えてならない。戦争と平和に関しては、エントロピーの増減を《意識》の方向の正しい判断の尺度とするだけでも、判定困難な問題がなお多数残されているというべきであろう。

矛盾の共存

《意識》はエントロピーの増大の方向とは逆方向に進むという限りにおいて矛盾はないが、これまでみてきたように《意識》論には観念的との批判を免れない側面とともに、いくつかの矛盾が介在している。例えば、「生命と意識の同一性」、全生物の《意識》と人間の意識の同質性、さらには《意識》の方向性と未来予知の不可能性を強調しておきながら《意識》による目標の達成を説くことなどである。しかし、サン＝テグジュペリはこれらの矛盾をむしろ避け難いものと自認していたかのように、人々を魅了してやまない一見明快な総合的体系の危険性を指摘して、それは「取り返しのつかない断絶によって人間を破滅させるであろう」（Ⅳ－119）と述べるとともに、「はくの諸構造は相互に重なり合っている。推論は——これは必然的に区別すものだから——不確かとなり混乱してくる」（Ⅳ－154）と言葉による重構造的概念の説明の困難さを語り、それに伴う名状しがたい不安の克服に努めつつも、「はくは自家撞着を少しも恐れない。なぜなら、矛盾はその対象をしかと把握しえないでいる言語のつぶやきにすぎないことを知っているからだ。矛盾を恐れいつも論理的であろうとするものは、自分のうちなる生命を殺してしまう」（Ⅳ－133）とも語っている。敢えていえば、矛盾の内包をも理解することによって、《意識》概念の重みと魅力はいつそう増してくるようと思われるのである。

これとは異質のもう一つの矛盾がある。それは二律背反に満ちた世界の中で彼に求められた苛酷な選択と決断の問題である。倫理上も亡命ほど彼を苦しめた矛盾はなかったが、人間の尊厳への信頼と平和への期待から生まれた<意識>概念が、時代の試練とはいえ、従軍や兵器の正当化に貢献する役割を担ったことも悲しむべき矛盾であった。サン＝テグジュペリは矛盾から抜け出す方法は二つあるとして、「そのひとつは、なんでもよいからある単純な体系を構築し、その体系の示す真理に反するものを錯誤と命名することである。それは神や悪魔の姿をはっきりと思い浮かべる狂信者の世界である」(Ⅳ-112)とし、「いまひとつの方法は、たとえそれが人間の精神にとって耐えられないことであっても、まさに耐えがたいものであるからこそ、矛盾を認める立場をとることである。(中略) 矛盾を受け入れることから生じる不快、混乱、疑惑や無秩序ですら、本質的には豊かなものであり、狂信者の信仰より高度な喜び、つまり、良心の勝利の喜びを準備してくれるものである」(同上)と、自らを諭すかのような口調で書きとめている。後者の方法が<意識>の進む道に沿うものであることはいうまでもない。「微妙な矛盾、それをよく理解し、愛してもいた」³⁹⁾と親友レオン・ヴェルトは後に語っているが、サン＝テグジュペリの人生そのものがしばしば二律背反にさらされた苛酷なものであったことを知るべきである。

翻訳書の「あとがき」にもあるように、サン＝テグジュペリは「人間の尊厳を高めるものにのみ関心が集中」³⁹⁾していた。混乱と精神の退廃にも鋭い観察眼を備えてはいたが、「築くということこそ、はくの仕事なのだ。より広大な総合のみが魅力的なのである」⁴⁰⁾と、暗い現実を超克の対象でしかなかった。概念の絶えざる貢献によって文明が進化してきたことを否定する「明快さ」の魔力をもつナチズム⁴¹⁾に抗して、「広大な総合」のみが人々と時代を救済しうるものであることを彼は深く認識していた。祖国と文明への犠牲的な奉仕という「未来の動機」(Ⅳ-112)に駆られながら、彼は懸命に「総合」を追求した。ナチズムの暴虐を前にしても彼は人間の尊厳への信頼を失うことはなかったからである。また、「フランコの場合とは逆に、はくははくの平和を先に延ばすことを受けいれている」(Ⅳ-112)⁴²⁾と、「総合」による平和の訪れを確信してもいた。悲しげな表情をのぞかせてはいるが、この確信にこそサン＝テグジュペリの偉大さが偲ばれるといってもよいであろう。この確信は単なる信念の類ではなく、エントロピーの増大に抗する生命を生みだし、悠久の時間をかけて環境に適合させてもきた<意識>という概念に支えられたものであり、生命の進化における突然変異の偶然説が今日も支配的であるとはいえ、サン＝テグジュペリ独自のこの概念に限りない生命の輝きを感じない人はいないであろう。

註

- 1) 本論文では、ANTOINE DE SAINT-EXUPÉRY <CARNETS> (Gallimard, 1975) および同書の翻訳「手帖」(杉山毅訳, サン＝テグジュペリ著作集 5, みすず書房, 1990) を用いて論究したが, 原版の編者であるピエール・シュヴリエは序文において, 「残された手帖の解説は困難をきわめた。なぜなら, 机に向かって書く場合でも, この著者はペン先を裏返して細かい字を書き, しかも略字や数学的記号を多用していたからである。(中略) サン＝テグジュペリには自分の手帖を出版する考えはまったくなかった」(翻訳書, VI頁) と記しているが, 自然科学分野の豊富な知識を備えない限り, 解説後の文章においてもなお随所に難解であることは否めない。
- 2) 杉山毅氏の翻訳書は, 難解な内容をできるだけ平明に訳出しようとの苦心に満ち, 「手帖」の理解を深める上で欠くことのできないものであった。氏に敬意と感謝の意を表するとともに, 本論文における「手帖」からの引用はすべて同翻訳書によっていることも断わらせていただきたい。
- 3) <CARNETS>, p. 241. なお編者は, 「物理学者たちがよく知っているプランクの定数としてなじまれている記号」である h の物理学的解説を加えるとともに, この文章は「さまざまな理由で驚くべき印象を与えるものであるが, サン＝テグジュペリが波動力学について多くの考察を試みていたことを想起させる」(翻訳書328頁) と注記している。
- 4) 本論文の執筆に当たり, 小出昭一郎・我孫子誠也著「エントロピーとは何だろうか」(岩波書店, 1990), E. シュレーディンガー著「生命とは何か」(岡小天・鎮目恭夫訳, 岩波書店, 1994), ジャック・モノー著「偶然と必然」(渡辺格・村上光彦訳, みすず書房, 1976) を読んだが, 物理化学的基礎知識の皆無に等しい私にとっては, これらの一般書でさえ理解できない箇所が数えきれないほどあり, これらの疑問点についての深い理解は到底不可能にしても, 差し当たり必要な概説的な知識だけでも獲得すべく, 後藤信行氏(長崎大学教養部物理学教授)の協力を仰いだ。氏には地球環境の危機的状況に関する認識についても多大な示唆をいただき感謝に堪えない。
- 5) サン＝テグジュペリは物理的, 統計的蓋然性に反する生命の本質について考察するとともに, 「間隙 hiatus」なる語を用いて生命進化の謎に迫り, この点の考察に「手帖」の多量の部分を費やしているが, 本稿では彼の「エントロピー論」に焦点を絞るべく, この「間隙」をめぐる生命論については表面的に触れるにとどめた。彼の科学論と合わせ, 改めて論じることとしたい。なお, 地球上のエントロピーの危機的増大が叫ばれる今日, 彼の<意識>論をいかに受けとめるべきかについては, 拙論「サン＝テグジュペリの生命・意識論と地球環境の危機」(本巻所収)を参照されたい。
- 6) 「手帖」はI～Vおよび補遺からなっており, 補遺の部分を除いて各文章に番号が付されている。引用の後のカッコ内のローマ数字とアラビア数字は「手帖」における文章の番号を示す。以下同様。
- 7) この引用文は, 「<すべての方向が可能である。しかし, もしそのひとつのが創造的ならば, それは実現されなければならない。> 純粋な決定論と同じく突然変異説も結局はこの公理に帰着する」という文章に続くものである。
- 8) 「生物変移説や適応性説や再生説などのあやまちが, どうしてそれと似たものである生氣説に反する議論であろうか。意識に対するより以上に, 進化の生氣論の原則に完璧さを要求する理由はない」(IV-72) というのも, 神秘的生氣論とは一線を画してのことである。
- 9) サン＝テグジュペリは「創造的進化の公理」を説きながらも, 「存在するものが過去の状態よりもより高度な組織をもつものになろうとするのは, どのようにしてであるのか」(IV-38) と, 生命の進化の「間隙」(註5参照)を「事実, 人間であるはくを苦しめている問題」とも語っている。神秘論的になることを避けつつ, この問題を<意識>の介在によって解決しようと努めたことは明らかである。
- 10) この「理性」なる語は編者の解説によっても「疑わしい語」とされている。
- 11) この「理性によるコントロール」とは, 「熱力学でエントロピーと呼ばれている現象を,

- 自然界の到るところにはくは発見することができる。意識が介入しなければエネルギーは散逸する。(中略) 理性によるコントロールを加えずその体系をそのまま放置しておけば、エネルギーは散逸」すると、エントロピーやエネルギーに関する文脈の中で用いられている表現であるが、《意識》の方向に対する逆行現象についても当てはめることができよう。
- 12) この考察は、「明らかにデモクラシーは統計学的確率、エントロピーの増大、権威の極限までの分割（無政府主義）、エネルギーの散逸へと向かっている」というデモクラシー批判との関連においてなされたものである。
 - 13) Hとは「従軍パイロット」において説かれている HOMME（普遍の人間性）とも解されようが、この概念は「手帖」では展開されていないし、前後の文脈からして HITLER を指すものと思われる。（後註29参照）
 - 14) 《CARNETS》は、主題別に配列し直され、分量も約5分の3に圧縮された版が編年版（1975）に先んじて1953年に出版（Gallimard）されているが、編年版の出版を勧めたアルベール・カミュの手紙や、長年月を要したその実現に至る経緯は、翻訳書の「解説」に詳しい。「手帖」の執筆時期は、編者と翻訳者の見解を総合すれば、1935年の早い時期から1942年頃までと推定されるが、編年版の出版によってサン＝テグジュペリの思索の跡を辿ることが可能になったことは、私にとってこの上なく有意義であった。例えばフランスの現状やデモクラシーに対する批判を含む重要な一節IV-135が1940年頃に書かれたとする翻訳者の推定に傾くとともに、「アメリカが参戦する道！」という言葉がこの一節に見出し、同年12月のアメリカへの亡命という緊迫した状況を想起せずにはいられなかった。また、「エントロピー」なる語の初出がこの一節に近いIV-78であることにも深い感銘を覚えた。
 - 15) これは情報の均一性について否定的に述べた文章の中に見い出されるが、この感慨が情報のあり方に限られるものでないことは明らかであろう。
 - 16) サン＝テグジュペリには今も誤解や非難があるが、翻訳書の「解説」に「彼にとっては右翼とか左翼とかいうレッテルは無用のものであり、人間の尊厳を高めるものだけにのみ関心が集中していたということなのである。ともあれ、本書を注意深く読めば、そこに、さまざまな誤解のいくつか（すべてとは言わない）から、サン＝テグジュペリを救出しうる鍵を発見することができるはずである」とある。全く同感である。
 - 17) 翻訳書「補遺」340頁
 - 18) 19) 20) 翻訳書「補遺」341-342頁
 - 21) 結果を必然と決めつける独りよがりの目的論を否定したうえで、「種と外界の作用の決定論が、かくして生命に向かって収斂すること、この収斂の奇跡、ここにこそ真の目的論がある」（IV-38）として、《意識》による生命の進化の作用自体に目的論を位置づけることはできるとしている。
 - 22) 創発的進化論哲学とは「進化の各段階は既存の諸要因の総和ではなく、これらにもとづく新たな性質の出現であるとする説。C. L. モーガンの造語」という訳注があるが、サン＝テグジュペリはこのイギリスの動物心理学者（1852-1936）の著作「動物の心」（1930）を読んだのであろうか。
 - 23) 精神分析論に関する考察の中で述べられたものであるが、能動的ないし受動的な「表現の欲求のもどかしさ」や係争が「進歩の原動力、動物から人間への上昇の原動力」であり、そこに「人間のもつ概念の勝利を見い出す」として、人間の超克性を強調しているのである。
 - 24) PILOTE DE GUERRE, Gallimard, 1942, p. 241
 - 25) Ibid., p. 214
 - 26) UN SENS À LA VIE, Gallimard, 1956, p. 230 (Lettre au Général <X>)
 - 27) 「犠牲的奉仕」と「時代への憎悪」の共存については拙論「サン＝テグジュペリ『X将軍への手紙』の『特異性』について」（長崎大学教養部紀要、人文科学篇、第33巻、第2号、1993）参照。
 - 28) 「この引用は聖ヒエロニムスの翻訳によるヴルガータ聖書の「詩篇」103からの抜粋である」と原注にある。

- 29) サン＝テグジュペリは「従軍パイロット」において「普遍的人間性 HOMME」の概念を力強く読者に語りかけているが、この概念は＜意識＞概念をいわば大衆向けにかみ砕いたものであることは明らかである。＜HOMME＞の説得力は「手帖」における＜意識 CONSCIENCE＞概念の深淵性にその秘密があるといってよいであろう。なお、註13参照。
- 30) 前掲書 UN SENS À LA VIE, p. 160
- 31) 「手帖」は出版の意図をもたない単なるメモに過ぎなかったが、ここで培われた＜意識＞概念が「従軍パイロット」や「人生に意味を」において、読者に分かりやすく説き明かされていることは疑う余地のないことである。
- 32) サン＝テグジュペリは創造的進化の不可視的方向性について、「神秘」ではなく「基本的な不確定さを当てにすることで、ぼくには十分である」としている。
- 33) 34) 前註14参照
- 35) 亡命は二律背反的な苦悩の選択であった。拙論「サン＝テグジュペリの亡命における二律背反の不可避性について」（長崎大学教養部紀要，人文科学篇，第32巻，第2号，1992），および「サン＝テグジュペリの亡命に関する一考察」——決断と責任をめぐって——」（九州フランス文学会「フランス文学論集」第27号，1992）を参照されたい。
- 36) サン＝テグジュペリが反戦論者であったとの誤解が日本の多くの読者にみられるが、それは彼の思想と行動に対する深い理解に欠けるのみならず、旧枢軸国側の戦後世論としての反戦思想に安易に傾倒している結果といわざるをえず、反戦の思想と行動の深化のためには、真剣にサン＝テグジュペリの武装論の検証を経る必要がある。また、痛ましいほどの苦しみを反映した彼の戦争と平和論を、「戦争肯定論」として一蹴することも軽率のそしりを免れない。
- 37) このメモはCなる人物が「それと知らぬまま分ちがたい結合に参与した」ことに対する苦い思いを綴ったものであるが、こうした現象も人間の理解の及ばないところで神には受け入れられているということであろう。
- 38) RENÉ DELANGE, LA VIE DE SAINT-EXUPÉRY, p. 158 (WERTH)
- 39) 翻訳書381頁
- 40) 翻訳書「補遺」340頁
- 41) サン＝テグジュペリはナチズムについて、「知識人に対する告発。ナチ党員は洞穴時代から現代文明に至るまでの人間がたどった全行程が、＜知識人＞と彼が呼ぶもの、つまり多少とも自由に表明された新しい概念の絶えざる貢献のおかげで、進化してきたとは考えていない」（Ⅳ－119）と述べて、その「低級な知性の支配」（同）を断罪するとともに、「人びとは明快さというこの魅力に抗する術を知らないから、あのような真理が＜成長する＞」として、この明快さの魔力を打破する総合的な概念の確立を志しているのである。
- 42) 「フランコの場合とは逆に」とは、「フランコは、あらゆる自由を一時的に断念することが明日の解放を準備するという論法で、その平和を正当化している」と、引用箇所（Ⅳ－112）の冒頭にあるからである。

（1996年4月30日受理）